

ぼくの失敗（はずかしい話をこっぴどくだけ…たぐわんめんじゅ）

いずみ学力研 金井 敬之

今から25年近く前のことだ。30代のぼくは、その時の6年生の担任をしていた。

6月のある日、学校で歯科検診があった。その当時の養護教諭の先生は、保健室前の廊下に「虫歯治療の木」(実際はもっと、しゃれたネーミングだったと思う)という掲示物を作って、虫歯を治療する子どもを増やす取り組みをわけていた。

「虫歯治療の木」は、数年前からの取り組みであったが、虫歯のある子全員が治療できた学級は今までなかった。

歯医者さんに行かせて治療を受けさせるのは、家庭に関わることであり、教師からの働きかけもなかったら、全員が治療を済ませることが困難なのは当然のことであった。

昔の話なので、記憶は定かではないが、その養護教諭の先生と、全員完治したりすればいいですねというふうな会話をしたと思う。もし、ぼくのクラスが全員完治したら、子ども

たちに表彰状をください。そして、お祝いに飲みに行きましょうという約束をした(と思う)。ぼくはそのことを励みに早速取り組みを始めた。取り組みと言っても大したことをしたわけではない。虫歯治療の健康面と学力面の意義をクラスで話し、学級通信で啓発をした程度である。

どんな取り組みでもそうだが、半分くらいの子が達成するまでは順調に進んでいく。そして最後の数人になってからがなかなか進まない。家庭の事情もあるし、無理強いをしたり、あと何人などと急ぎ立てたりしないように心がけたつもりだった。しかし、最後の最後でぼくは失敗をしてしまうのである。

全員完治！ だが…

実は、この年ぼくのクラスは全員が完治したのだ。ここ数年初めてのことであった。養護教諭の先生は喜んでくれた。子どもたちに表彰状もくれた。うれしみのあまのぼ

くは学級通信に次のように書いてしまったのである。「昨日の朝、Tさんが『先生、はじ』と言って、歯科検診の治療済みの用紙を持ってきてくれました。これで6年1組全員の治療が終わりました。………」と。

翌日、Tさんのおうちの方から学校に電話があった。抗議の電話である。「うちは、母子家庭で、私は仕事が忙しくて、なかなか子どもを歯医者に連れていくことができなかった。最後になったのは私の仕事が忙しかったためで、わが子に責任はない。何も、最後であることを学級通信に書いて、みんなに知らせることはないのではないかと。真つ当な言い分である。ぼくは治療の順番など考えたことはなかった。この取り組みで、学級通信で治療が終わった他の子の名前を出したこともなかったし、全員達成まであと何人ですとカウントダウンもしなかった。

全員達成のうれしさを伝えるとき、臨場感をもってその時の様子を伝えたかったために「Tさんが『先生、はい』と言って………」という表現をしてしまったのだ(それは言い訳にしかすぎないが)。

その当時のぼくは、全員達成がしたいとい

自分勝手な思いしか頭になく、その子の思いやおうちの人への配慮がかけていたのである。表彰状をもらい、飲みに行くという自己満足しか考えてなかったひどい教師だったのである。(結局、飲み会にはいかなかった。行く気分になれなかった)

授業参観の100ます計算

それから数年後、転勤をして5年生を担任していた時のことである。

4月の授業参観の冒頭に100ます計算を行った。新学期から100ます計算に取り組んで、計算が早くなった様子をおうちの人の見てもらいたいというのがねらいだった。クラスで100ます計算が速い子も、そうでない子も、その子なりにタイムを縮めていること、ほくは満足していた。おうちの人もお子さんの頑張りと上達をみてもらいたかった。

「オーい、スタートー」といってほくの合図で一斉に子どもたちの鉛筆が動き出した。1分少したつと次々に終了する子が出てくる。終わった子は、自分の記録を「シート」に記入し、静かに待っている。計算している子があと数人になった頃に、Nさんという子の席の横に

おうちの人が来て、心配そうに、そしてやや怒ったような顔で、その子の計算の様子をながめているのである。

ほくはしまったーと思った。その子のおうちの人は、わが子の計算が遅いのを気にされていたのだ。授業参観という多くの保護者のいる前で、その子の計算の様子を見せてしまったのだ。担任のほくは、Nさんの100ます計算の伸びを知っているし、他の子どもたちもNさんの頑張りを知っている。クラスの子どもたちには、100ます計算は人との競争ではなく、昨日の自分に挑戦することに値打ちがあると普段から伝えている。見かけの速さよりも、個人の伸び率を評価してきた。

しかし、おうちの人には、初めて見るわが子の計算風景である。わが子の頑張りのよりも、まわりの子との計算時間の差を見せつけてしまったということになる。

またもや配慮が足らなかったのである。

失敗から学んだこと

虫歯完治の失敗も100ます計算の失敗も、全員させるということの吟味と最後の子への配慮のなきが原因であった(それだけではないが)。

同じように100ます計算をクラスでしていても、効果が出る場合とそうでないときがある。100ます計算で学校が荒れたということを知ることがある。学力研の1000人プロジェクトの岡さんは、実践の子どもの実態や状況に応じた配慮や細かい手立てを「やじ加減」と呼んでくるが、ほくの昔の失敗は、「やじ加減」以前の問題である。

国語の音読で「1斉めいめい読み」という読み方がある。自分の読む速さで自分に聞かせるくらいの声で文章を何度か読むという方法である。ほくは、そのとき「全員起立。5回読みます。1回ごとに方向を変えます。5回目は座って読みます。」という指示を出す。そして、全員が座った頃、5回目の途中あたりで「読むのをやめましょう」という指示をする。最後の子が5回読みまで待っていると、だんだん読む子が少なくなり、教室が静かになってくる中で、音読の苦手な子が読み続けなければならないという状況を作らないという配慮なのである。

もしかすると、それは先の失敗から学んだような気がする。